

目指すは汎用性より専門性

アプリケーションから独立してビジネスルールだけを管理できるBRMS製品は、汎用性よりむしろ専門性での差別化が重要になってきている。製品選定においては、ベンダーが提供可能な標準ルールについて考慮する必要がある。

ビジネスルール・マネジメント・システム

「ある条件が満たされる時、何かを実行する」今更言うまでもないがアプリケーションは“ If ~ Then ~ ”文で表されるビジネスルールを数多く含んでおり、多くのシステムではルールとそれに基づく処理はプログラムとして一体化している。このためビジネス要件に従ってルールだけを変更したい場合でも、プログラムの修正は避けられない。複雑なルールになればなるほど、変更に伴う時間やコストは増大する。

そこで、ビジネスルールとプログラムを分離し、プログラムの修正無しにルールの変更を可能にしたのがビジネスルール・マネジメント・システム（BRMS）である。現在BRMSは専門ベンダー、データベースベンダー、プラットフォームベンダーなどから多種多様な製品が提供されており、基本的には図表1のような機能要素で構成されている。

ルールエディタはエンドユーザがビジネス

ルールを作成、編集するための画面アプリケーションであり、その内容はリポジトリと呼ばれるデータベースに格納される。それを参照して実際にルールの判定と処理を行うのがルールエンジンであり、任意のアプリケーションからインタフェース（API）を通してその実行を要求することが可能である。

ルール管理に求められるノウハウ

最近のBRMS製品はルールエディタの機能性や使い易さをアピールしたものが増えてきており、ルール管理と運用がエンドユーザだけで可能としているものもある。しかし、高機能なエディタの恩恵に預かれるのはBRMS全体の運用過程の中ではごく一部分に過ぎないことに注意すべきである。

いかにルールの編集が容易であっても、そのテストは業務系であれば従来型のシステム開発と同等レベルのものが要求されるはずである。例えば既存のルールを変更した場合、そのルールのテストを行うための入力データを用意する必要があるだろうし、関係のない他のルールに影響を及ぼしていないことも検査しておくべきであろう。

さらに、BRMSの新規導入の際には、ルール設計への配慮も必要となる。業務上の取り決めや既存システムから、ルールを抽出して定型化する作業が最初に必要となるが、それはシステム開発の基本設計に該当する工程である。将来的に変化する可能性のある部分と、

Writer's Profile



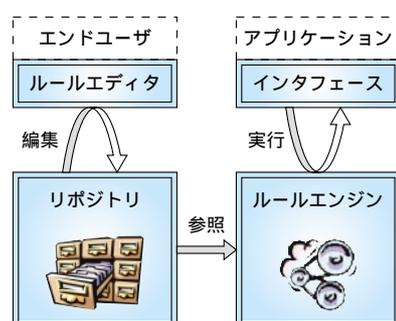
角田 充弘
Mitsuhiko Tsunoda

金融ITイノベーション研究部
システムコンサルタント

専門はITアーキテクチャ設計

focus@nri.co.jp

図表1 BRMSの機能構成要素



そうでない部分の分離を行っておくなど、ルールの最初の作りこみにはシステムエンジニアのノウハウも必要となろう。

適用業務の専門化が進むBRMS

ルールエディタやルールエンジンが成熟し、各社製品の機能が一定のレベルに到達してしまうと、BRMSが汎用製品であるが故に他社との差別化が困難になってくる。そのためBRMSベンダーが、今後何を付加価値として顧客にアピールしていくのか、二つの戦略を例に挙げて展望してみたい。

一つ目は、ルールそのもののパッケージ化である。クレジットカードの不正利用検出やマネーロンダリング検知など、特定業界で標準的に採用されるべき共通のルールについては、予め定義されたパッケージとして提供することで、導入期間の短縮や、初期ルール設計に伴うコストの削減が期待できる。

パッケージ化可能なルールには、前述した不正検知だけでなく、証券取引における売買チェックや、コンプライアンスチェック、ローン・カード発行時の与信審査、保険の料率計算、ECサイトの商品レコメンデーションなどにも応用可能であろう。

複雑系リアルタイム処理への進化

二つ目は、複雑かつ大量のリアルタイムデータ処理へのBRMSの応用である。株価をリアルタイムで受信し、VWAP（出来高加重平均株価）や株価リターンの時系列相関を計算するようなシステムは、高速でのルールマッチングと時系列データの処理が要求される。

従来は汎用のRDBと高度なプログラミングスキルを用いて実現されてきた領域であるが、RDBが高速のデータ取り込みや継続的な検索の実行を想定した設計になっていない点や、カスタムプログラム開発には時間とコストを要する点が課題であった。

これに対し、メモリデータベースの高速化

技術と、BRMSの効率的なデータマッチング技術を組み合わせた、コンプレックス・イベントプロセッサ（CEP）と呼ばれる製品群が現れてきており、秒間数10万トランザクション以上という高い処理性能を売り物に、アルゴリズム取引システムなどにも応用されている。

従来のBRMSが様々な用途への適用を可能とする汎用性を売り物にしているのに対し、CEPは適用領域を絞り込んだ製品作りがなされているのが特徴的である。

BRMS導入時の注意点

BRMSベンダーが業界での標準ルールを提供したり、特定用途に最適化されたCEP製品が広がりを見せたりするなど、ルールエンジン関連市場は汎用性よりむしろ専門性での差別化を意識してきているように思える。この傾向が今後も続けば、専門化された付加価値を持たないBRMSベンダーは、いずれ淘汰されて行くに違いない。

そのような中でBRMSベンダーや製品を選定する際には、エンドユーザが触れるルールエディタのユーザインタフェースだけに目をとられることなく、その製品が得意とする専門領域の見極めとともに、そのベンダーが提供可能な標準ルールが、自らのビジネス領域に合致しているかどうかを十分に評価しておくべきであろう。

図表 2 BRMS関連製品の展望

